



～児童が自ら創造する図画工作科の授業づくりのために～

関連・題材づくり 図画工作科 ならべてならべて(造形遊び)→算数科 かたちあそび

→ 本時 図画工作科 ペったん ころころ(造形遊び)

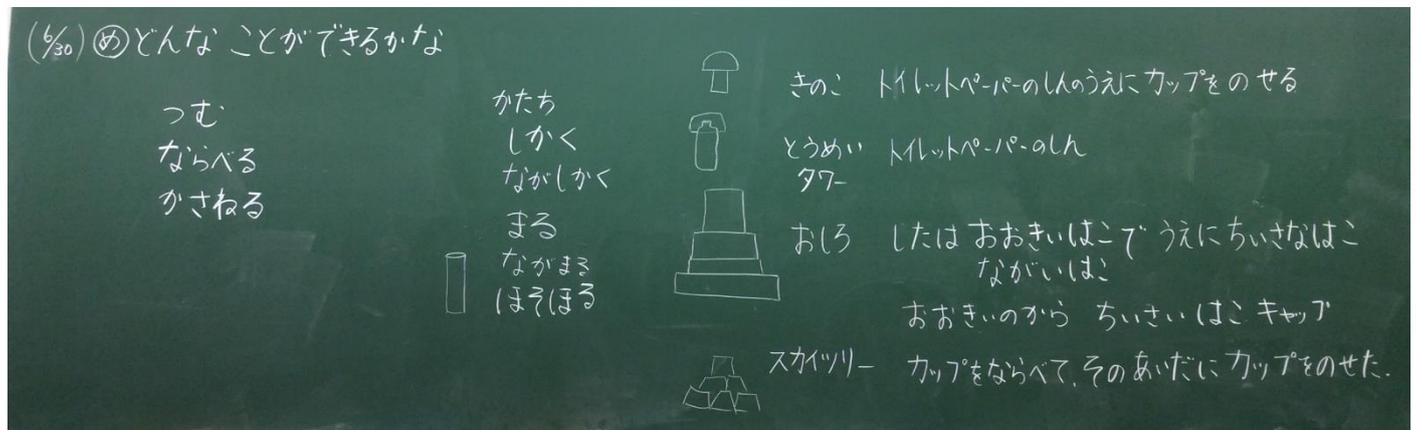
佐賀大学教育学部附属小学校 石松 可奈子

1 本時につながる実践

題材1 「ならべてならべて(造形遊び) 全2時間」

柱1 生活や社会とのつながりを実感することができる教科横断的な題材づくり

算数科「かたちあそび」10月単元と図画工作科をつなげた題材である。図画工作科「ならべてならべて」では、家から持ち寄った箱(直方体)、筒型(トイレットペーパーの芯、ラップの芯)、カップ類(ヨーグルト、プリンカップ、豆腐カップ)などを並べながら思いついたことを楽しむことができるように、導入では、「どんなことができるかな」と尋ねて活動につなげた。教室にある机を下げ、広い場所を確保し、体全体を使って活動することができた。初めは、並べる、積むなどそれぞれが活動していたが、友達と活動することで、持ち寄った材料が増え、大きさや形に着目し大きな箱の中に小さな箱を入れる、高く積む、組み合わせる、何かに見立てるなど広がっていた。どんなことができたかを児童に尋ね、板書にまとめた。



柱2 つくりだした意味や価値を自覚するデジタルポートフォリオ(図エアルバム)の取り組み

活動中は、「どんなことをしているか」と尋ねながら、活動の様子を教師が写真を撮ったり、「先生、見てみて。〇〇だよ」と、つぶやいていた児童の様子に「どうやってしたの」と尋ねながら記録に残したりした。活動を価値づける手立ての1つにした。

2 活動の実際

この時期の児童は、活動を通して、いろいろなことを思い付いたり、自由に試したりする。幼児期の積み木の経験を生かし並べたり積んだりといった繰り返しの遊びを好んで、つくりかえながら活動を楽しんでいた。以下の児童たちは、積むことに楽しみを感じ、より高くなるように試行錯誤していた。倒れないように筒を箱で囲んで頑丈にし、その上に筒状のものを乗せていた。初めは、座って活動していたが、高くなるとともに達成感や喜びを体で表していることも伝わってくる。デジタルポートフォリオは、児童の活動だけではなく、なぜ、その活動をこだわっているか、変化を追う手立ての一つにもなるよさもあった。





ようこそ 光の王国 ライトファンタジーへ 石松可奈子

附属小学校がある佐賀市では、この時期、佐賀駅南口から県庁までのメインストリートを中心にライトファンタジーが開催され、児童も楽しみにしている。理科の「電気の通り道」の学習の終末には、「何かつくってみたい」と声が挙がった。理科で学習した光の面白さと図画工作科の学びがつながり、見方・考え方を働かせ深い学びになるように、他教科と関連付け、児童の関心や制作意欲を高めた。造形的な見方・考え方とは、「感性や想像力を働かせ対象や事象を形や色などの造形的な視点で捉え自分なりのイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」である。造形的な見方・考え方を働かせながら学ぶ本単元及び本時における児童の姿を全体要項の「深い学び」に関わる児童の姿と関連させると表1のようになる。本実戦で児童が働かせていた見方・考え方とそのために教師がとった方策は表2である。

表1 造形的な見方・考え方

学年	見方	考え方
低学年	・形や色 (形、線、色、触った感じ等)	・イメージをもつ (広げる)
中学年	・形や色などの感じ (形や色などから得られる印象、楽しさやすずしい等)	・具体化、抽象化 (多面的にみる、順序立てる、分類する、比較する、選択する、関係付ける、応用する等)
高学年	・形や色などの造形的な特徴 (色の鮮やかさ、動き、奥行き、バランス等)	

表2 第3学年の実践における「見方・考え方」と、教師がとった方策

児童が働かせた「見方・考え方」	教師とった方策
<p>【関連づける】～理科で関心をもった光を基に図画工作科で表したいものへとつなげる～ 理科の学習で豆電球に光をつけることに面白さを感じ「何かつくりたい」と声があがった。光に焦点化し、光の面白さや美しさに興味をもつことができるように、児童一人一人がA4用紙にウェビングで書き可視化した。明るい、オレンジ色といった光がもっているものだけではなく、中には、すでに表したいものを表記している児童もいた。</p> 	<p>【関連付ける】～理科で学んだ光に関心を高め、図画工作科で表したい意欲を高める工夫～ 関心を高めることができるように図工室の電気を消して、暗幕のカーテンを閉めて図工室全体を暗くした。児童は暗い図工室に入ると同時に、教室から持ってきた豆電球の光をつけて、床や天井を照らしていた。 導入では、光の美しさや面白さに関心を高めることができるように自分たちの身近にある秋冬の風物詩であるライトファンタジーの写真電子黒板で見せ、家から持ってきたペットボトルやカップと豆電球で何ができそうか尋ね、本時のめあてにつなげ、自らつくりたい意欲へとつなげた。</p>
<p>【多面的に見る】～自分が表したものを確認し、よさを自覚している姿～ 表したいものが形になってくると、表したものに上や横から角度を変えて光を当てたり、手に取って様々な角度から光を当て、床や天井にどう映るか見たりしていた。また、活動中は作品を見せ合いながら「きれいだね」とつぶやいたり、作品のよさを伝え合ったりして、よさを実感していた。</p>	<p>【多面的に見る】～場の工夫～ つくったものがどう映るかいろいろな角度から確かめることができるように、図工室を広くしたり黒いビニール袋で暗室を確保したりした。場を確保することで、立って上から見たり横から見たり体全体を使って表現することができていた。</p> 

理科の学習で豆電球に光をつける楽しさを感じていたため、教科横断的な学びや児童の思いを大切に図画工作科で表したいものへとつなげた。児童が、より見方・考え方を働かせることができるように図工室を暗くすることで、小さな光でもよく光っていた。豆電球は児童の手に持ちやすく、いろいろな角度から光を当てることができた。ペットボトルやカップなどの材料の形や大きさなどに進んで関わり、材料を並べる、切って形を変える、テープでつなげる活動をしながらいメージしたものになるように表していた。大まかな形が出来上がってくると、材料にペンで色をつけ、それに光を当ててどう見えるか試しながら活動していた。光に集中して取り組み、豆電球の光をつくったものに当てたり、より一層暗いブラックボックスの中でどう映るか比較したりしながら進んでいた。プラスチックでできた透明な材料と紙コップでは映り方や印象が違うことを感じている児童もいた。造形的な視点を基に発想を広げ、光の当て方、場所や周りの明暗によって作品の映り方の違いを試し、つくり、つくりかえながら自分が表したいものへとつなげていた。活動中は、自由にタブレット端末に自分がつくったものを記録することで、始めに表したいものと今つくっているものを比較したり、色や光方がどう見えるか多角的に見たりしてつくりだした喜びや造形的な価値を感じていた。(図1)



図1 タブレット端末に記録している児童



～児童が自ら創造する図画工作科の授業づくりのために～

関連・題材づくり 外国語活動 I like～.→ 図画工作科 もうすぐ夏休みどんなことをしたいかな(共同制作)

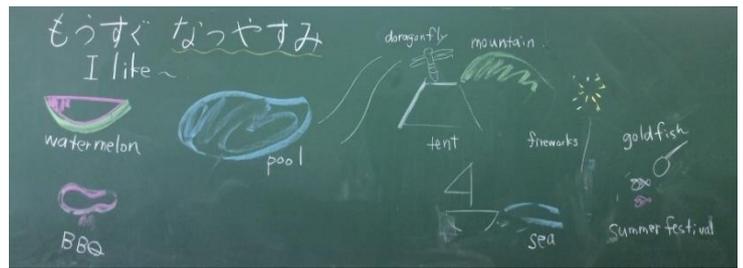
佐賀大学教育学部附属小学校 石松 可奈子

1 本時につながる実践

題材1 「もうすぐ なつやすみ どんなことをしたいかな(絵 共同制作) 全1時間」

柱1 生活や社会とのつながりを実感することができる教科横断的な題材づくり

外国語活動「好きなものなあに」とつなげた題材である。教師が夏に関係するもの I like watermelon を言った後に、その絵を黒板に描きました。What do you like? と、尋ねると、初めは好きな動物を答えていたが、教師が What do you like Summer Vacation? と言いながら黒板に描いてある夏休みの文字を指すと、夏休みというキーワードに気づき I like BBQ/pool/sea/mountain/dragonfly/など夏を意識したやりとりで伝えるようになりました。子どもたちは、日本語や英語で夏休みにしたいことを伝えていました。



T: What do you like summer vacation?

C: 金魚すくい

T: Oh, goldfish (黒板に金魚の絵を描く)

Summer festival.

そんなやりとりをしていると、描きたい声が聞こえてきたところで、教室や廊下に障子紙を広げました。すると「わー。大きい。すごい」大きな紙を目の前にするだけで、気持ちや活動意欲が高まり、体全体で表現することができました。

T: Do you have a crayon? Please stand up. Let's start.

C: Yeah. Pool/water slide/watermelon etc...

柱2 つくりだした意味や価値を自覚するデジタルポートフォリオ(図エアルバム)の取り組み

活動中は、児童が「先生、アイスクリーム/かき氷食べたい」「水族館に行つてクラゲを見たい」と言ったので、描いた絵を見て英語で ice cream/shaved ice/jellyfish など言ってやり取りをしたり、活動の様子を教師が写真を撮ったりした。教師用のタブレット端末1台を渡し、「気に入ったところを写真で撮っていいよ」と伝えたら、友達と譲りながら記録していた。教師が「どうしてその写真を撮ったの」と尋ねると、「カラフルなホテルに行つてみたいから」と答えた。



気に入ったところを撮影する児童

2 活動の実際

この時期の児童は、カタカナ表記のもの、漢字、外国語などいろいろなことに興味を持ち生活したり、学習したりしている。私たちは、幼き時に近くにいた家族、保育者、友達とやり取りをしながら、自然と母国語を話せるようになった。言葉を覚え、もっと伝えたいと思うのは、相手に伝わり、相手が発話、表情、ジェスチャーで反応して認めてくれることに喜びを感じることができるからである。それは、言葉を習得するときの過程にとどまらず、子どもたちが描いたもの、表現したもの(文字、発話)が相手(友達、教師)に伝わり、相手(友達、教師)が称賛し認めてもらった時にさらに自信となる。

「この絵をどうしたい」と尋ねると、「たくさんの人に見てもらいたい」と答え、みんなで作り上げたものをどこに飾ろうかと、校内を歩きながら、お気に入りの場所を考えていた。「見てもらいたい」その言葉から達成感が伝わってきた。

教師が子どもたちの活動に価値づけをして、達成感を感じ自信をもつてのびのびと体全体で表現できるように、教師自身も子どもたちと一緒に活動を楽しんでいきたい。



I like～. 言葉で表現



絵で表現



展示したい場所を見つける



校内展示